

詩篇73篇17節 「聖所に入って悟ること」

1A 賛美の門

1B 歌い手アサフ

2B 賛美による聖所

2A 滑りかけた歩み 1-16

1B 主の慈しみ深さ 1

2B 悪しき者の栄え 2-12

3B 空しい心の清め 13-16

3A 悪しき者の最期 17-28

1B 突然の滅び 17-20

2B 自分の愚かさ 21-22

3B 主の支え 23-24

4B 主のご臨在 25-28

4A 聖所に行く決断

本文

今、詩篇 73 篇 17 節を見てください。「73:17 ついに私は神の聖所に入って彼らの最期を悟った。」73 篇の中で、ここの箇所を境にして、著者アサフの思いがガラッと変わります。初めは落ち込み、滑り落ちそうになっているアサフの独白がありました。けれども、聖所に入った後、悪しき者たちの速やかな滅びを悟り、主が自分を支え、主と共にいることこそが喜びだと告白しています。ここに、賛美の力があります。私たちが、これが現実だと思っていることがあり、重荷として自分に押しかかり、信仰が弱められてしまいます。けれども賛美によって、初めて神の真実と恵みを知り、信仰が強められるのです。

1A 賛美の門

1B 歌い手アサフ

73 篇の著者アサフは、ダビデによって歌い手に任命されたレビ人の奉仕者です。ダビデが神の箱をエルサレムに運んでいる時に、シンバルをたたくように任じられています（Ⅰ歴代 16:5）。ダビデは、自分の子ソロモンが建てる神殿と、そこでの奉仕の分担を指示していました。アサフが、「豎琴と琴とシンバルに合わせて預言する者とした。(25:1)」とあり、アサフの指揮の下で動く人々の名が列挙されています。そして後にソロモンが神殿を建てた後に、神の箱をその中に運ぶ時に、アサフがその賛美を指揮しています（Ⅱ歴代 5:12）。

2B 賛美による聖所

賛美の働きは、このように、栄光の主がおられるところに導くところに意義があります。詩篇 100 篇を読んでみましょう。

- 1 全地よ【主】に向かって喜びの声をあげよ。
- 2 喜びをもって【主】に仕えよ。喜び歌いつつ御前に来たれ。
- 3 知れ。【主】こそ神。主が私たちが造られた。私たちは主のもの 主の民その牧場の羊。
- 4 感謝しつつ 主の門に賛美しつつ その大庭に入れ。主に感謝し 御名をほめたたえよ。
- 5 【主】はいつくしみ深く その恵みはとこしえまで その真実は代々に至る。

賛美によって、主のおられる神殿の中に人々を導きます。そして主の本質は、慈しみ深さであり、とこしえの恵みと真実です。

2A 滑りかけた歩み 1-16

このアサフは、「足がつかずきそうで、私の歩みは滑りかけた。(2 節)」と告白しています。世の中の現実を見て、つかずきそうになっていて、滑りかけているのです。みなさん、そういった経験はないでしょうか？ある意味、それは毎日、毎週なのではないでしょうか？自分に圧しかかる、世の思い煩いと重荷です。

アサフの場合、彼は年を取ったからなのか、どうなのか分かりませんが、心身が弱まっていたようです。26 節を見ると、「この身も心も尽き果てるでしょう。」とあります。その中で、心の中でもいろいろな変化が起こっていたようです。

1B 主の慈しみ深さ 1

しかしアサフは、そんな中でも、しっかりと神の慈しみ深さを知っていました。「73:1 まことに神はいつくしみ深い。イスラエルに心の清らかな人たちに。」ここの「いつくしみ深い」は、ヘブル語でトブ、良いという意味です。主が天地を造られた時に、良かったと言われた時と同じ言葉です。みなさんの信仰が、たとえアサフのように滑りそうになっても、立ち返ることができるのか、あるいは、さ迷って、信仰から離れるかのすべての分かれ目は、「主は良い方」であるかどうかを知っているかであります。チャック・スミスは絶えず話していました。「自分に分からないことが起こったら、すでに分かっているところに立ち戻るべきだ。」なぜ、こんな悲しいことが起こったのか、理解できません。けれども、主が良いお方であることは分かっています。理解できないことで、分かっていることまで犠牲にははいけません。理解できているところに戻って、そこに留まるのです。

2B 悪しき者の栄え 2-12

彼がつかずきそうになっているのは、悪者が栄えているように見えることです。2 節から 12 節ま

でをざっと読んでみます。

- ²けれどもこの私は 足がつまずきそうで 私の歩みは滑りかけた。
- ³それは 私が悪しき者が栄えるのを見て 誇り高ぶる者をねたんだからだ。
- ⁴実に 彼らの死には苦痛がなく 彼らのからだは肥えている。
- ⁵人が苦勞するときに 彼らはそうではなく ほかの人のように 打たれることもない。
- ⁶それゆえ 高慢が彼らの首飾りとなり 暴虐の衣が彼らをおおっている。
- ⁷彼らの目は脂肪でふくらみ 心の思い描くものがあふれ出る。
- ⁸彼らは嘲り 悪意をもって語り 高い所から虐げを言う。
- ⁹彼らは口を天に据え その舌は地を行き巡る。
- ¹⁰それゆえ この民はここに帰り 豊かな水は彼らに汲み尽くされる。
- ¹¹そして 彼らは言う。「どうして神が知るだろうか。いと高き方に知識があるだろうか。」
- ¹²見よ これが悪しき者。彼らはいつまでも安らかで 富を増している。

いかがですか？神は知らないとして、いい加減なことをこれだけ行っても、特に災いがその人に降りかかっているようには見えないのです。主をかつて信じていたけれども、今は、信じているようには生活していない人々を観察していると、必ずしも悪いことが起こっていませんね。むしろ、生活がスムーズに行っています。逆に言えば、神を信じていなくても、何か生活に大きな変化が起こるわけがないので、だから、神を信じる必要を感じないと言えます。

3B 空しい心の清め 13-16

だから信じて生きること、主に仕えることが空しく感じます。アサフが独白します。

- ¹³ただ空しく 私は自分の心を清め 手を洗って 自分を汚れなしとした。
- ¹⁴私は 休みなく打たれ 朝ごとに懲らしめを受けた。
- ¹⁵もしも私が「このままを語ろう」と言っていたなら きっと私は あなたの子らの世代を 裏切っていたことだろう。
- ¹⁶私は このことを理解しようとしたが それは 私の目には苦役であった。

自分の心がかなりすさんでいたので、もしそれを他の信者に話したら、つまりかせてしまったことだろう、ということです。

3A 悪しき者の最期 17-28

1B 突然の滅び 17-20

けれども、彼は、神の聖所に入りました。すると大きなことが起こります。

¹⁷ ついに私は 神の聖所に入って 彼らの最期を悟った。

¹⁸ まことに あなたは彼らを滑りやすい所に置き 彼らを滅びに突き落とされます。

¹⁹ ああ 彼らは瞬間に滅ぼされ 突然の恐怖で 滅ぼし尽くされます。

²⁰ 目覚めの夢のように 主よ あなたが目覚ますとき 彼らの姿を蔑まれます。

神の聖所に入ると、全く見方が変わります。今、自分が肉の目で見ているのは、とても限られています。しかし、神の聖所に入ると、神から見た世界が見えます。時間を越えて、永遠の視野からの世界を私たちに見せてくれます。エリシャの家の周りを、アラムの精鋭部隊が包囲した時、しもべは、もう終わりだと思いましたが、エリシャは彼に、霊の領域で起こっていることが見えるように祈りました。すると、そのアラムの軍隊を、火の戦車や火の馬が逆に包囲していたのです。

だから、私たちが神の聖所に入ることがいかに大切かを知るのです。自分の見えてくることのすべてを変えてしまいます。

2B 自分の愚かさ 21-22

²¹ 私の心が苦みに満ち 私の内なる思いが突き刺されたとき

²² 私は愚かで考えもなく あなたの前で 獣のようでした。

このようにアサフは、自分の思っていたこと、考えていたことが、いかに愚かであったかを思い返しています。まるで獣のようであったと。つまり、感覚的なことでしか考えておらず、悟りがなかったことを悔いています。

3B 主の支え 23-24

²³ しかし 私は絶えずあなたとともにいました。あなたは私の右の手をしっかりとつかんでくださいました。²⁴ あなたは 私を諭して導き 後には栄光のうちに受け入れてくださいます。

これはすばらしいです。自分はまだだめだ、クリスチャンとしてきちんとできていないと思うことがあるでしょう。しかし、自分がだめだと思っている時にこそ、実は主が自分をしっかりと支えてくださったことを知るのです。そして、確かに栄光のうちに受け入れてくれるところまで、守ってくださいます。私たちを諭しながら守ってくださいます。

(有名な詩がありますね。「砂の上の足跡(Footprints in the Sand)」という題です。

ある晩、男が夢をみていた。夢の中で彼は、神と並んで浜辺を歩いているのだった。そして空の向こうには、彼のこれまでの人生が映し出されては消えていった。どの場面でも、砂の上にはふたりの足跡が残されていた。ひとつは彼自身のもの、もうひとつは神のもの

のだった。

人生のつい先ほどの場面が目の前から消えていくと、彼はふりかえり、砂の上の足跡を眺めた。すると彼の人生の道程には、ひとりの足跡しか残っていない場所が、いくつもあ
るのだった。しかもそれは、彼の人生の中でも、特につらく、悲しいときに起きているのだ
った。

すっかり悩んでしまった彼は、神にそのことをたずねてみた。「主よ、私があなたに従って
生きると決めたとき、あなたはずっと私とともに歩いてくださるとおっしゃられた。しかし、私
の人生のもっとも困難なときには、いつもひとりの足跡しか残っていないではありません
か。私が一番にあなたを必要としたときに、なぜあなたは私を見捨てられたのですか」

主は答えられた。「わが子よ。私の大切な子供よ。私はあなたを愛している。私はあ
なたを見捨てはしない。あなたの試練と苦しみのあるときに、ひとりの足跡しか残されていない
のは、その時はわたしがあなたを背負って歩いていたのだ」

4B 主のご臨在 25-28

そしてついに、主ご自身がともにおられることこそが、自分にとっての喜びだと、立ち戻ることが
できたのです。

²⁵ あなたのほかに 天では 私にだれがいるでしょう。地では 私はだれをも望みません。

²⁶ この身も心も尽き果てるでしょう。しかし 神は私の心の岩 とこしえに 私が受ける割り当ての
地。

²⁷ 見よ あなたから遠く離れている者は滅びます。あなたに背き 不実を行う者を あなたはみな
滅ぼされます。

²⁸ しかし 私にとって 神のみそばにすることが 幸せです。私は 神である主を私の避け所とし
あなたのすべてのみわざを語り告げます。

主ご自身のおられるところに、とこしえの喜びがあります。それを知っている人は幸いです。

4A 聖所に行く決断

ですから、私たちは、神の聖所に行く決意を固めなければいけません。あまりにも多くの人が、
決意ではなく、都合や気持ちで聖所に来ようとしています。「今日は、礼拝に集う気持ちがしないから、
教会に行かない。」とか、「この用事があるから行かない」とか。では、生活にある怒濤のごとく襲
いかかる、世の思い煩いにどうやって打ち勝つのでしょうか？自分の生活に主をお迎えするの
です。ですから、賛美で始まる礼拝に集うのです。